

本^{ほど}たちを解く

小説・評論・エッセイのたのしみ

阿部浪子

阿部浪子

小説・評論
土井のたのしみ

本
た
ち
を
解
く

江
学院図書館
書章

本たちを解く^{ほど}——小説・評論・エッセイのたのしみ

一九九八年十月十二日発行

著者 阿部浪子

発行者 及川隆彦

発行所 ながらみ書房

〒101-0061 東京都千代田区三崎町三―二―一三

秋和ビル四〇六号

電話 〇三―三三三四―二九二六

振替 〇〇―一六〇―一―一二四二九八

発売元 はる書房

〒101-0065 東京都千代田区西神田一―三―一四

根木ビル

電話 〇三―三一九三―八五四九

振替 〇〇―一〇―六一―三三三三七

印刷 株式会社シナノ

製本 ナショナル製本

定価 一八〇〇円（税別）

© Namiko Abe 1998 Printed in Japan

ISBN4-938133-84-9 C0095

目次

『王の闇』 沢木耕太郎 14

『ノンキが来た』 阪田寛夫 16

『生きたしるし』 中野孝次 18

『野溝七生子という人』 矢川澄子 20

『志賀直哉』 本多秋五 22

目次
『百合子、ダスヴィダーニヤ』 沢部仁美 24

『横光利一論』 栗坪良樹 26

『すぎ去ればすべてなつかしい日々』 永瀬清子 28

『荷車の歌』 山代巴 30

『尾崎翠の感覚世界』 加藤幸子 32

『雁と胡椒』 埴谷雄高 34

『仮説の物語り』 松本健一 36

『文学的孤児たちの行方』 小笠原賢二 38

『横光利一』 菅野昭正 40

『目玉の散歩』 村田喜代子 42

目次

『まだ生まれない夢のために』	吉岡紗千子	44
『天心に帆』	晋樹隆彦	46
『青年茂吉』	北杜夫	48
『会津異端の系譜』	北篤	50
『人間 坂口安吾』	野原一夫	52
『崩れ』	幸田文	54
『僕にとっての同時代文学』	猪野謙二	56
『マロニエと梅の花』	平林英子	58
『ひとひらの舟』	三枝和子	60

『女の書く自伝』 キャロリン・ハイルブラン 大社淑子訳 62

『ガンを征服する人』 グレッグ・アンダーソン 近藤ユリ訳 64

『風を見ていたひと』 吉屋えい子 66

『評伝 今西錦司』 本田靖春 68

『客の多い家』 吉田知子 70

『会いませんか？ 話ませんか？』 中林重祐 72

『花後の想い』 渋沢孝輔 74

『白い道をゆく旅』 岡百合子 76

『画家の妻たち』 澤地久枝 78

目次

『谷崎文学の愉しみ』 河野多恵子 80

『蝶と海』 清岡卓行 82

『鳥たちのふしぎ・不思議』 加藤幸子 島田璃里 浜田剛爾 樋口広芳 84

『姉の力 樋口一葉』 関礼子 86

『藤枝静男と私』 小川国夫 88

『さくらんぼジャム』 庄野潤三 90

『昭和は遠く』 松浦喜一 92

『女と男の未来形』 海老坂武 94

『動物のぞき』 幸田文 96

『父の威厳』 藤原正彦 98

『人間・野上弥生子』 中村智子 100

『父逍遙の背中』 飯塚くに 小西聖一編 102

『小石川の家』 青木玉 104

『一本の茎の上に』 茨木のり子 106

『全身小説家』 原一男 108

『失われた思春期』 堅達京子 稲川英二 110

『終焉からの問い』 小笠原賢二 112

『性という情緒』 富岡多恵子 114

目次

『透谷の妻』 江刺昭子 116

『八度めの年おんな』 櫛田ふき 118

『医者という仕事』 南木佳士 120

『木山捷平の生涯』 栗谷川虹 122

『新しき鍵』 三浦綾子 124

『山荘往来』 宇田健編 126

『海の螢』 滝川尚枝 128

『エッセイスト』 玉村豊男 130

『戦場の女流作家たち』 高崎隆治 132

『生と死の幻想』 鈴木光司 134

『わが千年の男たち』 永井路子 136

『風が吹く日は社員に会いたい』 たかはたけいこ 138

『聖岩』 日野啓三 140

『砂上の祝祭』 村永大和 142

『どう生きる、日本人』 原田奈翁雄 144

『折々の葉』 藤原てい 146

『森の時代』 稲葉真弓 148

『千年往来』 吉田知子 150

目次

『水の面』^{おもて} 山本昌代 152

『千代の青春』 山代巴 154

『くるくるサイクル』 杉本利男 156

『幸せになりたい』 乃南アサ 158

『鏡をみてはいけません』 田辺聖子 160

『わたしの宇野千代』 瀬戸内寂聴 162

『不思議な事があるものだ』 宇野千代

『生きて行く私』 宇野千代

『おさきに』 林京子 166

『形見の声』 石牟礼道子 168

『輪廻の暦』 萩原葉子 170

『ガラスの愛』 稲葉真弓 172

『冬物語』 南木佳士 174

『食卓のない家』 円地文子 176

『われらが内なる隠蔽』 柴谷篤弘 178

『むくどりの巣ごもり』 池澤夏樹 180

『うるわしき日々』 小島信夫 182

『吉野川』 大原富枝 184

目次

『怠惰の逆接』 松原新一 186

『わがふところにさくら来てちる』 今野寿美 188

『水の抱擁』 山本道子 190

あとがき 192

初出一覧 195

装画 柳澤紀子

装幀 渡辺美知子

本たちを解く^{ほど} ● 小説・評論・エッセイのたのしみ

『王の闇』 沢木耕太郎

五人の男の「戦後」がおもしろい。大場政夫、瀬古利彦、輪島功一、前溝隆男、そしてスモークン・ジョー。みな、勝負の世界に生きたスポーツマンである。彼らは悪戦苦闘して王座を勝ちとった。しかし、空高く舞いあがった者も、いずれは地上に降りてこなければならぬ。その降りかたに、沢木耕太郎氏は執着する。

「戦後」をどう闘いおえるか、しかも自力で。その闘いぶりこそ、実は「もう一つの人生」を決めるという。だがその舞台裏は、観客には見られないものだ。著者は、彼らと二人だけの「場」を作ること、観客には確かめられぬ、彼らの姿を、彼らの肉声をも、読者に伝えてみせるのである。王座を守った直後、スポーツカーを運転中に自爆した、ボクサーの大場。彼を育てた女性マネージャーが、彼の生前について語る。また、プロ・スポーツ界を漂流した前溝が、そのこしかたを語る。二人の姿は、証言と独白をとおして浮かびあがるけれど、「場」のなかに描き出される姿の鮮やかさには及ばない。

ソウル五輪を最後にマラソンから引退し、監督に転身した瀬古のすがたも印象的だが、そ